

平成20年産水稻の作柄に関する委員会（第3回）議事要旨

1 開催日時：平成20年8月27日（金） 14:00～16:00

2 開催場所：農林水産省大臣官房統計部第1会議室

3 出席者：【委員】

畑中孝晴（座長）、黒田栄喜、丸山幸夫、近藤始彦、長谷川利拡、諸岡浩子

【専門委員】

安藤勲、中野吉庸（代理出席）、栗原竜也（代理出席）

【事務局】

大臣官房統計部長、生産流通消費統計課長、他

4 議事

- (1) 平成20年産水稻の8月15日現在の作柄概況及び次回調査（もみ数確定期）の実施に当たっての留意事項について
- (2) その他

5 議事概要

- (1) 平成20年産水稻の8月15日現在の作柄概況及び次回調査（もみ数確定期）の実施に当たっての留意事項について

事務局から、平成20年産水稻の8月15日現在の作柄概況、本年の気象状況、病害虫の発生状況等について説明後、各委員から意見・提言を受けた。

（○：委員からの発言 →：事務局等からの発言）

- 8月20、21日以降5日間ほど東北で平均気温で16℃の日が続いたが、これは穂揃い後10～20日後だったので、9月の登熟への影響に注視する必要がある。7月以降高温が続いている関東以西においては、高温障害による品質低下が懸念される。

- 北海道・東北においては、8月中旬から低温が続いており、今後もこの傾向が続くようであれば、収量低下が懸念される。寡照が続く場合には、平年以上に得られた籾数ほどに収量は高くないと予想される。四国などでの用水不足、北日本の登熟期低温は懸念材料である。

次回の9月15日現在の作柄調査の実施に当たっての留意事項としては、東北、北海道においては、登熟期間中の低温、地域によっては寡照が長引く場合には、粒重や品質の低下が懸念される。西日本では7月以降、約1か月半、高温状態で

経過したことが、特に九州の普通期の籾数や登熟への影響を注視する必要がある。
その他、関東での大雨による倒伏にも注意すべきである。

- 西日本では平均気温30度程度の高温が1か月以上継続している地域が多く、今後も高温傾向に推移すると予報されている。現在の食味重視の施肥体系で高温が長期継続した場合、収量の停滞や低下が懸念される。普通期栽培、遅場地帯において、現在の施肥体系との絡みで収量への影響が出てくるであろう。

次回の9月15日現在の作柄調査の実施に当たっての留意事項としては、北日本における8月中旬の低温・日照不足が登熟に及ぼす影響、東日本及び西日本における高温及び斑点米カメムシが米品質に及ぼす影響、西日本、特に四国における寡雨が灌漑管理や収量及び米品質に及ぼす影響、今後の台風や集中豪雨の動向等である。

- 8月中旬まで一部地域を除いて平年並み以上の気温、日照時間であったため早場地帯での登熟前半はほぼ順調であったとみられるが、8月中旬以降の低日射の影響、特に品質への影響に留意する必要がある。

次回の9月15日現在の作柄調査の実施に当たっての留意事項としては、早場地帯における登熟の良否について登熟期間中の気温、日射の低下の影響、また、西日本での出穂前の長期高温の影響である。

また、普通期における籾数と多籾数の場合の登熟の進行の把握である。

- 7、8月の東日本以西の高温、東海地方以西の少雨、北日本の寡照、7月下旬、8月中旬以降の北日本の低温等が懸念材料である。

東北地方の太平洋側で低温と日照不足に関する気象情報が25日に仙台管区の方から発表されているが、8月中旬頃からの日照不足は今後一週間程度は続く見込みである。下旬の低気温は一時的なものと予想している。

気温の変動が受精不良、不稔、乳白米発生、登熟不良等を引き起こす可能性がある。

今後、9月は気温は高いものの、7月や8月前半のような、雨のかなり少ないようなことはなく、平年程度の降水が見込まれる。8月25日現在、四国地方、中国地方の瀬戸内海側を中心に少雨の状況が続いているが、現在より深刻になることはないと予想する。

10月も気温は高い見込みで、高気圧や低気圧が交互に通り、天気は数日の周期で変わるが、太平洋側を中心に、低気圧の通過時にはまとまった量の雨となることが想定される。降水の状況が変わることが見込まれることから、病害虫の発生も懸念される。

次回の9月15日現在の作柄調査の実施に当たっての留意事項としては、7月後半から8月前半の出穂期や登熟期における、東日本や西日本での高温・少雨、北日本での低温・寡照等の影響である。

- 8月中旬以降、東北の日本海側等を中心にまだ日照時間が少ない部分もあり、いもち病に留意する必要がある。登熟障害については発生していない。
西日本では大きな減収要因はない。
次回の9月15日現在の作柄調査の実施に当たっては、カメムシや乳白米の多発による品質低下に留意する必要がある。

これらを踏まえ、再度意見・質問を受けた。

- 台風が今年は来ていないが、気象状況からいうと、平年の状態ではなく異常な年と言えるのか。
- 1951年以降では、1984、1986、2000年のように、台風が全く日本に上陸しなかった年もあり、今年が異常な年とはいえない。今年の夏は台風が発生することの多いフィリピン海付近で、高気圧が強く、台風の発生数自体が少なかった。
また、台風が日本付近に接近するかは、そのときの気圧配置や偏西風の動向によるため、一概にはいえないが、台風は高気圧の南側に沿うように華南や南シナ海北部へ進むものが多かった。今後の台風の上陸については、予想することは難しい。
- いもち病の状況はどうなっているか。
→ いもち病については今のところ減収要因とはなっていない。
- 南九州については、今年は品質も良くかなり流通することが予想される。
関東は降水量が多いため、量が出てこないのではないか。
- 関東近辺の早場地帯での状況は。
→ 現場の情報では田植期以降の日照不足の影響が、その後の天候により回復したといわれている。
莖数自体が少ないので、穂数や着粒数が多くなり世間一般には豊作なのではないかといわれているが、早生の品種で言えば平年並みぐらいであり、思ったより少ないとのことである。流通サイドには、関東での降雨続きによる品質低下の懸念がある。

上記質問・意見を踏まえ、委員会としての意見をまとめ、その場で了承された。
http://www.maff.go.jp/j/press/tokei/seiryu/080828_1.html

(2) その他

事務局から、次回委員会の開催と次回調査（もみ数確定期）の公表日程についての留意事項が説明された。

(参考)

○会議及び議事録を非公開とする理由

今回開催した水稻の作柄に関する委員会については、当年産の水稻の作柄に関して、学識経験者等から専門的な見地から意見を聴くために開催している。その内容は、個人・地域における水稻の品質、収量等に関する事項等、特定の個人若しくは団体に不当な利益若しくは不利益をもたらす恐れがある事項が含まれること等から、会議及び議事録を非公開としている。